

吉田松陰その① ほめるということ

「校長になったら、先生方にありがとうと言うことを心がけるとよい。ありがとうは魔法の言葉だ。」高校で日本史を教えてもらった先生からの電話だった。信頼している先生の言葉だし、このような助言には元来従順なこともあって、校長になってからは毎日のように「ありがとう。」を口にした。

二年半ほど経って、すこしばかり違うのではないかと思い始めた。「ありがとう。」とほめてあげるのではなくて、相手の努力や思いに気づき、自分が礼を言いたくなる、ほめたくなるのではないかと思うようになった。そして、ほめるということは、相手の素晴らしさがわかるというわたしの内面の問題ではないかと考えるようになった。

吉田松陰という人は、切り口によっていろいろな人柄に見える人だけれども、わたしにはとても魅力的な人に映る。松陰が松下村塾で、指導したのは、安政4年から安政5年にかけての一年と数か月に過ぎない。門下生としては、高杉晋作、久坂玄瑞、前原一誠、伊藤博文など、幕末から明治にかけて活躍した人たちが連なる。高杉と久坂を除くと、下級武士や農民が多く、長州藩の上級武士が明倫館という藩校に通っていたことからすると、どうして松下村塾の出身者だけがそれほどまでに活躍できたのかと不思議な気がする。松陰は、久坂を「年少防長第一流の人物たり、よってまた、天下の英才たり」とほめている。また、高杉についても「才は久坂、識は高杉」とほめているし、前原一誠については、「その才は久坂に及ばない。その識は高杉に及ばない。けれども人生完全なること兩名ことまた佐世（前原）に及ばない。」と言っている。

伊藤博文は、利助、俊輔、博文と名をかえているが、周防の出身で、桂小五郎のはぐくみという形で初めて長州藩士として活動できている。直接には松陰の指導を受けていないにも関わらず、松下村塾の出身者であることを常々口にしていた山県有朋とは違い、松下村塾出身であることを披歴しなかったという。松陰は、塾生の出自によって分け隔てするような人ではなかったけれども、高杉や久坂などの上級武士は、はぐくみの伊藤のことを軽く見ていたのではないか。伊藤について松陰は、「利助（伊藤）また進む。中々周旋家（政治家）になりそうな。」とほめている。伊藤は、この言葉を生涯我が誇りとして生きたという。

松陰は、「学問もできず人柄もこれといって秀でたところもない。しかし、わたしは愛嬌のある彼がかわいい。」と取り柄がないと言われてもしかたのない塾生までもほめている。彼はほめることによって塾生を伸ばそうなどと考えていたのではなく、心底から塾生のよさを感じ取り、それを素直に言葉にしていたのではないかと思える。心底からの言葉だからこそ、塾生はその言葉に勇気もらい、師を慕い自己の力を信じて生きることができたのではないかと思う。

人のよさがわかる人になりたい。そのよさを素直に口にできる人になりたいと思う。これが私の教師としての終着点だとすれば、ここまでこれたといううれしさと、ここまでしか届かなかったという少し残念な気持ちでいる。